第二十六回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナー　発表

実践的立場から唱題成仏を考える

唱題成仏を問う

赤堀正明

大動脈解離で集中治療室に入っていたのですが、残念ながら臨死体験できずにもどってまいりました。

三原所長の発題を受けて、私の「唱題成仏」について話させていただきます。

十八歳の頃断常二見の狭で色欲に翻奔される日々の中、法華経の「煩悩即菩提」という五字に出会い、次のように理解したのです。「色欲はなくすものでもなく、なくなるものでもない。色欲はそのままで、覚りとなる」と。

夏の猛暑に滝の飛沫を浴びたような爽快感を感じ、身と心にこびりついた苦悩の垢穢が同時に脱落したのです。

垢穢の脱落した私は、何が変わったのかというと、唯一つ、私の世界が一変したのです。『摩訶止観』に浄名経を引かれ「増上慢なきものには婬・怒・痴の性すなわち是解脱と解くなり」と説かれているように。

そして十九歳で出家しました。

出家当初は書画に志ざしていたのですが、まず生死の意味を明らかにしたいとの希いから、仏道を先にしたのです。立正大学で学び、卒業の時に三つの誓願を立てました。

一、法華経は最も優れた真理であるか

二、妙法蓮華経の五字にその真理の全てが具足しているのか

三、南無妙法蓮華経と唱えることによって、成仏できるのか

このうち一つは、御妙判、網要導師、本妙日臨師等の著作により、容易に理解されました。

第二の「妙法蓮華経の五字にその真理の全てが具足しているのか」は、『本尊抄』に「是好良薬とは寿量品の肝要たる名体宗用教の南無妙法蓮華経是なり」とあることから、京都西陣にある法華宗真門流の林日邵上人に法華玄義の講義を要請したのです。

その翌年、林上人の勧めもあり比叡山中の泰門庵に居を移し、比叡山学院に巡錫しました。

真門流の開山の常不軽院日真上人は、五重玄義を中心とした教義を図形曼荼羅などに著されており、私は参学の実を得、二年間の習学でこの願をはたすことができました。

泰門庵主の堀沢祖門上人は、十二年間籠山行を修められており、朝勤に好相行を簡略にした投地礼と共に「久遠実成釈迦牟尼如来」と唱える行法を取り入れておりました。

私は、この行儀から想を得て、「礼拝唱題行」とし、朝夕勧修したのです。

二十歳頃より一息一唱の唱題は常修し、また常時太鼓を打って行歩しておりましたので、これにより三種の行法を併せて修行することになりました。

これら三種の唱題行から、それまでにない信解品に説かれる「体信」とも言うべき功徳を得ることができたのです。細胞の一つ一つが生まれ変わるように、唱題による仏身の成就を身に感じられたのです。ここに第三の誓願が成就したのです。

こうした経験をもとに、先師の行儀に工夫を加え、平成四年に提唱したのが「妙法五種唱題行」です。

天台大師の四種三昧、日蓮聖人の三業受持に想を得、今日的意義を加え、唱題成仏の実効性を問うものです。

資料〈資料一〉と映像を参照いただきたいと思います。

その特色を二点挙げれば、難行として把えられかねない題目の三業受持を定型化し、容易に体得し得る易行とした点、そして狭義と広義の二義に分類し、道場の三業受持という自行の延長線上に、化他広布があることを明瞭にし、狭義・広義の唱題行により成仏できることを瞭然とした点です。

その後笹塚・新宿に道場を設け、布教していましたが、縁あって現代宗教研究所に勤務したのです。

そこでは諫言の甲斐なく、駆遣されるに至りました。

また同時期、新寺の建設を契約した工務店が倒産し、実父からは、信行の在り方を批難され、信徒の離散を招きました。

その後三年余、東京から印西に通い、新寺の建立を進めたのです。このころの寺を建てることの心境は、「あんのん」誌に「吾もまた塔建つる者」〈資料二〉とのタイトルで小文を掲せています。

新寺の建立が完成に近付いたころ、教化の内実に不足を感じていました。それは精神疾患に苦しんでいる人をどのように救い、成仏へ導くかが解明できていなかったのです。

『魔訶止観』には十境の中で病患境を述べていますが、己心中所行の法門に限られ教化の実際に可能なのかは不可知だったのです。先人の足跡も、資助となるものは見あたりませんでした。そうこう考えている間に、A女と出会ったのです。三十六歳になる女性Aは、六歳の頃皮膚病にかかり、診察した医師から長期に渡って性的虐待を受けたのです。

詳細はここでは省きますが、親よりもやさしくしてくれた医師から加えられた性的虐待は、複雑にA女の精神を蝕んでPTSDとして残り、彼女を苦しめることになりました。

出会って当初Aは、子供に対する粗暴な振舞や性的偏見などを自らの個性として受容れていましたが、唱題修行を重ねる間に、医師から受けた行為によって自らの性格が形成されたことに気付き始めたのです。

修行が進むに従って、医師から虐待を受けることになった遠因も徐々に開明されてきたある日、ぽつりと「先生、景色は色があるんですね」とつぶやいたのです。

Aは生きることの意味を見出したことにより、色の無い、味気ない世界を彩られた美しい世界に変えたのです。地獄が浄土に転じたのです。

そして又、この教化を通じ、私自身の業の変化に気付かされたのです。A女を教化している私の業は、A女と共通の業を持ち、教化することによって、その業の意義を現し、共に昇華していたのです。

私の元の業が縁となってA女の業と雙立し、雙照し、業の自在を得たのです。私はこうした教化によって、自らもまた成仏することを確信したのです。

こうした教化の経緯を日蓮聖人の教義に照らし合わせてみます。

天台大師は止観を修する内、各論を十境十乗として分説されていますが、「業相観」に「平平の運心には相すなわち現ぜず、今止観を修するによく諸々の業を動かすが故に、善悪の相現ず」(『魔訶止観第五』

止観を修めることにより、諸業が動き、さまざま業相を現すのであり、ここに教化する自らの業と教化される側の業の関係が説かれています。

「法華経に云、深く罪福の相に達して……衆生のまさにこの業を持って得度すべきは諸々の業を示現して、この業を立つ。業と不業と縛脱得ることがたきも、普門示現して雙べて縛脱を照らす」(『魔訶止観第五』

空の不業と仮の業を並べて示現することにより、空に入ることができるという意味ですが、私見を加えれば、悟の業と迷の業と雙べることにより迷・悟相照らし、妙業となると領解しました。なぜなら天台大師も「深く達すとは、煩悩即菩提に達することである」と仰せられているからです。

この業と業の雙立は、止観においては心中に業の雙び立つことに他ならないのですが、日蓮聖人の唱題受持は事法

において雙び立つのです。『木絵二像開眼事』は、理法と事法に分け、理法は生身得忍、事法は即身成仏と分別されています。

この「以業立業」の事象世界での展開こそが釈尊・法華経の真意であるとされたのが日蓮聖人です。

『諫暁八幡抄』に「殺を以て利他の法門となす」というお言葉があります。

「鴦崛摩羅は、生々に殺生を示す……本凡夫にして有し時は、初発得道の始を成仏の後、化他門に出で給ふ時、我が得道の門を示すなり。妙楽大師云、若し本に従いて説かば亦是の如し、昔殺等の悪の中に於て能く出離す。故に是の故に迹の中に亦殺を以て利他の法門と為す」

ここには「自らの悪業の中で悟りを開いた者は、そこに到るまでの悪業を以って人々を教化するのである」と、述べられています。

鴦崛摩羅は九十九人の命を奪うという他の誰も犯し難い悪業により、誰よりも人の生死の業苦に深く通達し、人を生かし死から蘇えらせる修行に転じたのです。

仏道を得て後、教化のときには、過去に自らが犯した悪業を源泉として、化他の資となしたのです。

とすると、利他・教化というのは自らの過去の業を現わすことによって、被教化者との両業が雙立したときに、成就することになります。

「諸の悪も悪にあらず、みなこれ実相なりと達すれば、すなわち非道を行じて仏道に通達す」るのです。（『魔訶止観第五』）

私は、このように自らの悪業を示し、人々の迷いの業を悟りの業に転じていく、自他同時に成仏する行法が、色心に互る三業受持の唱題であると受けとめています。

私は、法華経の教えによって、入信得度し、狭義の唱題を修し、広義の唱題である化他行によって深信を得ること

ができたのです。

「仏に成り候事は別の様は候はず。南無妙法蓮華経と他事なく唱へ申して候へば、天然と三十二相八十種好を備ふる也。如我等無異と申して釈尊程の仏にやすやすと成り候也」『新池御書』

以上を以って、私の「唱題成仏」とさせていただきます。最後にこの期会を与えて下さった三原所長はじめ所員の皆様にお礼申し上げます。

〈資料一〉

新たに提唱する行法「一息一唱唱題行」

正しい呼吸、思念、姿勢で

妙法五種唱題行の提唱

現代宗教研究所主任・赤堀正明

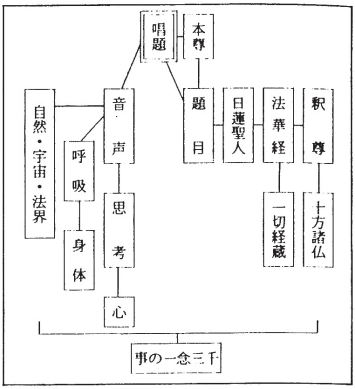
赤堀正明師

此文は十数年前より一人実践し、体得した一息一唱唱題行他を、ミトラ・サンガ諸師に語ったところ、発表を勧められたことから急遽執筆したものである。此文は旅中、夜半、枕頭において書き次いだもので、論理の整合を欠くことを危惧する。世に問うに、恥べきものではあるが、唱題の行法としての確立と、普遍性を意義付けるための一石として、敢えて提唱した次第である。文中、唱題を究明する原理面を置き、行法を先に述べたのは、需めに応じてのことであり、原理面（一～六）は、後日を期し詳説する。又、掲載の紙数に限りがあり、比喩、例証は引挙せず、理義のみを略述する。

尚、新たに提唱する唱題行は私の創始するものではない。本来、大聖人の唱題に具わっていたのを開出したのである。祖意の瑕瑾とならんことを危懼する。

「唱題」

唱題と、唱題による人間・社会・宇宙霊界に及ぼす影響等を明らかにするには次の諸点の究明が必要とされる。



一、題目の意味
二、題目の音声
三、唱題と思考との関連
四、唱題と呼吸との関連
五、唱題と思考と身体と心の関係
六、唱題と本尊との関係
七、題目の行法―妙法五種唱題行―

「妙法五種唱題行」

「日本乃至漢土月氏一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず、一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱ふべし。此事いまだひろまらず一閻浮提の内に仏滅後二千二百二十五年が間一人も唱へず、日蓮一人南無妙法蓮華経南無妙法蓮華経と声もをしまず唱ふるなり。」

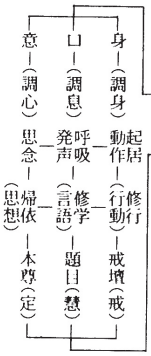
（『報恩鈔』）

妙法五字の信唱は日蓮仏教における正行である。

この唱題は妙法蓮華経に帰依し、随順し、修行することであり、心身を題目に任せることである。即ち、南無妙法蓮華経とは、妙法五字を身・口・意の三業に受持することに他ならない。

『阿仏房尼御前御返事』、『土籠御書』に説示されている、色心二法（三業）に渡って法華経を読むことへの讃嘆はこの趣きを説かれているのである。

唱題は、三業の内口業に相当するものであるが、意業と身業の中間に位置して双方に渡り、繋ぐものである。こゝに口唱の重要さがある。



『日女御前御返事』に「南無妙法蓮華経とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり」と示された義である。

唱題が正しく修行されるには、口業を中心として、意業、身業にも渡る必要がある。即ち、

一、完全呼吸に基づいた唱題〈妙息唱〉

一、題目への意識統一〈妙心〉

一、唱題時の正しい姿勢〈妙体〉

こゝに妙法五種唱題行を提唱するのは、従来の唱題形式の意義と位置を明確にし、新たに工夫した唱題行を加え、唱題の行法としての完全を期するために他ならない。殊に、一息一唱唱題行は唱題の意義を完備するものであり、この行法により、正しい呼吸、思念、姿勢を整え、妙息唱、妙心、妙体がもたらされる。こゝに戒、定、慧の三学が具足する。

唱題行に次の五種を挙げる。

㈠ 礼拝唱題行

㈡ 一息一唱唱題行

㈢ 緩急唱題行

㈣ 普通唱題行

㈤ 行道唱題行

この五種は、古来行われてきたものと、新たに工夫したものを合せ、唱題行の形態のほぼ全様に渡っていると考えられる。

普通唱題行

従来、唱題行の形態は木鉦、或は木魚に合わせ、一息に二三遍、多い場合は十数遍を唱える方式が普通である。この形態は通常法要・儀式の折に行われ、広く一般に流布している。又、特定の期日を限って、唱題修行する場合にも、この形態がとられている。この唱題行の長所は、散心の状態でも唱題でき、一心ともなり易い。又、多数で唱えるときは息の続くだけ唱え、息次ぎをして、どこからでも唱え加わることができる点である。逆に短所としては、唱題の速度が早く、一遍〳〵の唱題が単なる繰り返しになり、題目を粗雑に唱える嫌いがある。呼吸は適当であり、心、体、息の統一は調いにくい。

簡便、一般的であり、広く行われている唱題法であることから普通唱題行と名付けた。

緩急唱題行

この方式の唱題行は、湯行日淳上人が行法として整理されたものである。唱題時の緩急は自然となる場合と、故意にする場合がある。唱題により、意識が昂揚するに従い、更に唱題の速度の増す相乗現象は、心身の相関か

らも自然の現象である。

行法としては、自然に近い形での緩急を意識して行い、それを繰り返す方法をとる。

この方式の特徴は、緩速の唱題で心身を安定させ、急速の唱題で心身を高揚させ、両面相俟って、心身の平衡化を促すところにある。長所は、緩速の唱題による意識の集中と急速の唱題による意識の集中の質の違いにより、意識の拡散と集中とが、連続する行中に修められることにある。これは、精神の抑揚を調整する機能の活性化と弾性をもたらす。

短所は、一人の場合、緩急の調子がとりにくく、複数の場合は、導師、或は太鼓の打手の練熟度によって、調子に乗りにくい点である。又、短時間で精神の集中がはかられ易い反面、深い統一には入り難い。これは意識的に本人或は導師が緩急をつけるため、一定の状態に心を停めにくい点に因る。

三業が相応していない点は普通唱題行と同趣である。

湯川式唱題行は、古来からの普通唱題行に一石を投じ、唱題を行法として位置付け、一般に広布したことにおいて高く評価される。

湯川式唱題行は緩急唱題行の前後に浄心行と深心行と呼ぶ所謂座禅を用いている。

これは、普通唱題行と同じように、唱題と呼吸法が一体となっていないことから、三昧に入り難く、その不備を補うために有効な助行と考えられる。しかし、唱題一行の立場からすれば、唱題一行中に浄心、深心共に全具する行法が望まれよう。

礼拝唱題行

礼拝唱題行は法華経の根本心である題目と、その表現である根本行法の但行礼拝とを、唱題行として一体化したものである。帰趨するところは、題目とすべての存在への帰依・帰命を身・口・意の三業に表し、かつ体得するものである。

礼拝行は、『法華経　常不軽菩薩品第二十』の中、不軽菩薩が「専らに経典を読誦せずして、但礼拝を行」じた故事から生まれ、日蓮聖人も弘教の範とされている。

日蓮宗の儀規の中には『礼法華儀式』に次の類伴を見ることができる。

「一心敬礼　妙法蓮華経大曼荼羅法宝」
「一心敬礼　妙法蓮華経妙字法宝」
「一心敬礼　妙法蓮華経法字法宝」
「一心敬礼　妙法蓮華経蓮字法宝」

「一心敬礼　妙法蓮華経華字法宝」
「一心敬礼　妙法蓮華経経字法宝」

この『礼法華』は、天台の『法華三昧行法』から肝要を抽出した『法華懺法』を更に簡略にし、懺悔を主題とした行法で、古来、蓮門においても伝承されている。

『充治園礼誦儀記』の中にも「諸行中に礼拝は、最も信心念心の起き易きものなり」とあり、題目を礼拝することは信仰心を換起し、至信を体現し、信念を錬成・継承する優れた行法であることが肯首される。

礼拝の意は〝一心敬礼〟であると同時に〝一身敬礼〟でなければならない。この礼拝の意趣をもって、唱題の行法としたのが、示すところの礼拝唱題行である。

所作は、正座合掌の姿勢から肘を伸ばし、上半身を投げ出し、顔面接足投地礼を行い、同時に南無（ナームー）と語尾を伸ばして一息で唱える。

次に妙法（ミョーホー）を一息で唱えながら、妙（ミョー）で左足から起ち、右足を左足に引きつけ、法（ホー）で直立合掌する。

続いて、曲躬低頭の所作と同時に蓮（レーン）を唱え、華（ゲー）を唱えると共に右足を半歩引いて元の位置に戻し、左足を揃える。

最後に、経（キョオーウー）を唱えつつ、立膝から正座合掌に移り、投地礼で一巡する。二巡目からは、投地礼の状態で南無を唱え始める。

礼拝唱題行を複数で修行する場合、拍子木或は引磬、磬等を用いて唱題の始め毎に一打、終了を知らせる時は二打する。

礼拝唱題行は、屈身息と云われる上半身を前傾させ、体を二つに折る呼吸法が組み込まれており、自然に丹田呼吸が行われる。唱題行中、屈身の状態の時、息を吐き切ることにより、直身に戻ると同時に空気は自然に流入する。

礼拝唱題行を修行することにより、自然に丹田呼吸法を体得することが可能となるが、丹田呼吸は人体の自然治癒力を高め、心気を活性化する。

一息一唱唱題行

一息一唱唱題行は総ての唱題行の根本であり、身・口・意をもって題目と一体とし、体現する仏教行法の巨擘である。

一息一唱とは、一息で一度題目を唱える唱題法である。

この形態の唱題は、類例として、古来北山本門寺に伝承したとされる〝掛け合いの題目〟（詳細は不明）、日本

山妙法寺の唱題、湯川日淳門下の平原泰道上人の唱題がある。

〝掛け合いの題目〟とは、左右に列座する式衆が題目を交互に唱えたとされるもので、現在は行われていない。

日本山妙法寺の唱題は、日蓮宗の唱題速度に較べて緩やかである。行歩しつつ、撃鼓唱題することから、日常の呼吸に合わせて唱題するように変容したと考えられる。このことから、各別唱題法に関する意義付け、指導は見られず、唱法も人によって区々である。

唱法は、呼息において、緩かに唱題し、適当に吸息し、繰り返す方法である。

平原上人の唱法も、緩かな一呼息、一唱の唱題である。これは自動車に乗り、拡声器で唱題の声を流しながら布教されているところから起因していると想われる。吸気には特別の意は用いていない。これら三者は三様に卓越した唱法であるが、行法としては、一分欠ける。

新に提唱する『一息一唱唱題行』はこれらとは尠しく異なる。その相違点は、呼息と吸息に渡って意を用い、瞬時も題目と離心しないところにある。これに単唱式、相唱式の二形式がある。単唱式は一人で唱題する場合。相唱式は複数の場合である。

〈呼息〉―（唱題）
　南無　妙　法　蓮　華　経
〈吸息〉―（観想）
　南無　妙　法　蓮　華　経

単称の場合は呼息で唱題、吸息で題目を観想する。唱題の正境として、大曼荼羅本尊に向かい、丹田呼吸で調息の後、八拍手で唱える。唱題の速度はできるだけ緩かに長く、息の続く限り唱え、足心から頭頂まで搾り上げるように、息を体内に残さない気持で吐息する。このことから南無、妙、法、蓮、華までは各一拍手であるのに、経は四拍子の長息とする。

視線は、

一、大曼荼羅本尊の全体を仰視する。

二、中尊の題目を仰視する。

三、題目の一字一字を、唱える毎に仰視する。

四、眼を閉じて、題目七字を想念する。

この内より時処に応じて選択する。

心意は七字の題目を離れないように、心をこめて唱題し、他念は涌くに任せ、霧消すると心得て唱題する。

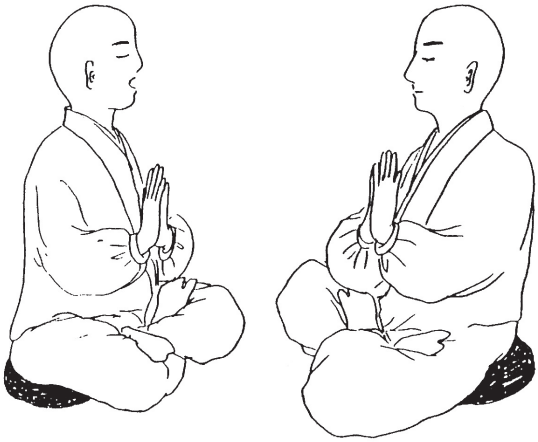
吸息は、唱題により息を吐き切った後、自然に息が体内に入るに合せて題目を念ずる。ただし、息を吐き切った後、急に息が入るのではなく、一拍か二拍、呼吸が停止した状態になることもある。

呼息と吸息の時間の配分は呼息二、吸息一の割合が適当である。呼息は一五秒から二十秒、吸息は七秒から十秒が目安である。これは年齢、練度によって無理なく行えばよい。

相唱式の場合は、左右二手に分れ、交互に唱題する。

㊨〈呼息〉（唱題）→〈吸息〉（聞法）→〈呼息〉（唱題）
㊧〈吸息〉（聞法）→〈呼息〉（唱題）→〈吸息〉（聞法）

一息一唱唱題行　（相唱式）



右方が唱題している時は、左方は聞法しながら吸息し、左方が唱題している時は、右方は聞法しながら吸息する。聞法は心気を込め、念唱に近い気持で行う。

唱題は単唱式と同じく長息の九拍で唱える。相対方は経の一拍が終ったところから唱題に入る。経の引声三拍と、南無妙法とは重唱することになる。これは呼息と吸息を無理なく行うためである。

坐形は結跏扶坐か半跏坐が適する。止むを得ない場合には正坐。

一息一唱唱題行の趣旨は、丹田呼吸を基とした唱法により、一唱一唱が心意と離れず、題目と心意と身軀とが一体となり、唱題三昧・法華三昧に入ることにある。法華三昧は色心三昧の異名であり、色心不二の境地は事の一念三千の根幹である。

行道唱題行

行道唱題行は、日常の起居動作の上に題目を体現する行法である。礼拝唱題行と共に、動態の唱題行である。

行道には堂内と堂外の行道があり、堂外では撃鼓して行進する場合が多い。こゝでは基本形として堂内における行道を中心に述べる。

堂内で行道しつつ唱題することは、法要時、昇堂・退

堂の折、或は施餓鬼会において行われている。しかしながら、この行道唱題は、法要儀式中の所作であり、行法として位置付けられているのではなく、内容も異なる。

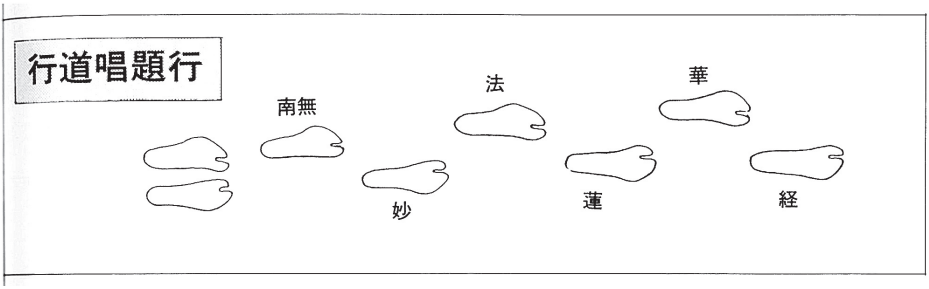
こゝで新たに、行道唱題行を提唱する意趣は、動中の唱題、足心の唱題とも言うべきもので、行歩と呼吸と唱題とを一体となし、唱題行とするものである。

行歩唱題の方法は左足から「南無」次いで右足で「妙」左足で「法」、右足で「蓮」、左足で「華」、右足で「経」で各一唱する。「経」は引声し、息を余さない。一人で行道する場合は自然に吸息し、続唱する。複数で行道する場合は三拍引声の後、三拍の間に吸息し、再び唱え始める。歩調は緩かに摺り足で、歩巾は一間六足、爪先に踵を合わせる程度の間隔で行歩する。身体は背筋を伸ばし、腰を引き、手掌は堅実心合掌で、眼睛は前方稍下方に向ける。

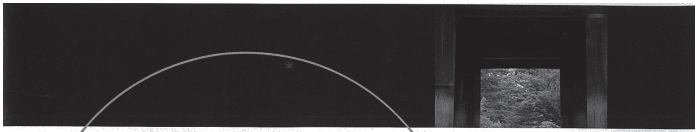
吸息の時は、大地より足心を通して自然の大気を吸引し、全身に生気が充満する気分で、

唱題の時は、題目の功徳が総身より宇宙に遍満する気分で行う。

（未了）



〈資料二〉



吾もまた塔建つる者

吾もまた塔建つる者
時は平成十六年二月の夕暮
ところは印西の古き町と、
新しき町の交わりたる
里山の辺、竹林の群れ立つ中、
塔は建てられたり
塔は釈迦牟尼仏座すところ
その息吹満ちて清澄に
目見えし人安らぎ、
新新なるところ
塔は寄辺
なれど、吾に宿疑あり
塔建つるとは何ごとぞ
塔は如何が塔たるや

二月七日の夕辺、
凛冽たる寒気に曝されて
塔は日の入るに従いて消ゆ
その時、冥茫続く吾が内に
塔は浮かびたり
一本の柱、心中に立ちたるを
五蘊和合して屹立するの塔
これは空にあらず、仮にあらず
如来の全身
吾は今塔建つる者
吾は今塔持つ者なり

私は今、寺を建てている。二十年前にある事情から、寺を建てることになった。元より、私は寺を必要とは考えていなかった。寺は仏教を求める上で、あまり重要な位置を占めていなかったからである。

私は寺の生まれではないので、生活の場は自分で確保しなければならなかった。今時、寺に生活することは修行や勉学ではなく、金銭の為の雑務が大方であると知っていたからだ。当然、衣食住の心配をしながら生活してきた。

寺を造るのも信徒からの財施はあったが、自ら借財を背負い、工事の一部を受け持ちながらの普請であった。

お堂と住まいを別々に建てることは予算的に無理で、一つの建物で兼ねることにした。それでもごく普通の家屋を建てる予算での出発であった。

こうした状況から古民家に着目した。古民家の土間をお堂に、その他の居住空間を庫裏に転用しようと計画したのである。

島根の太田市から雪中解体した、煤けて泥だらけの木材の山を見た時は、途方に暮れた。それでも一年掛かりでようやく屋根が載った。木部は柿渋と紅殻で塗装することになって、友人や信徒の人たちが手伝いに来てくれた。

二月十五日、小学校五年生のあゆみちゃんが、近所の直売店で買ってきた薩摩芋に、新聞紙を一枚ずつ濡らしてくるみ、それをアルミホイルに包んでドラム缶の灰の中で焼き芋にした。

火を囲み暖たまりながら、紅殻の色の上がり具合や、仏教に巡り合えた喜びを話し合っている。楽しく、ほがらかに時が過ぎていく。そこに釈尊も微笑みながら、話に耳を傾けている。そう感じてなんの不思議があるのだろう。法華経の宝塔品にこうあるではないか。

我が滅度の後我が全身を供養せんと欲せん者は、一の大塔を起つべし。・・・

若し法華経を説くことあれば、彼の宝塔皆其の前に湧出して、全身、塔の中に在して讃めて善哉善哉と言ふ

如来の全身とは、何を以ってそう言うのだろう。そこに全てがあるという事は、如来はそこにしかいないのだとも聞こえる。そこに如来の存在を感じられなかったら如来はどこにも現れないという事になる。そう受け取っても良いのではないか。

私の中に宝塔が湧き上がったのは、ここに法華経が説かれたからなのだろうか。疲れていやいや通っているうちに、意識が混濁して無理やりその理由をこじつけただけなのだろうか。

まだ塔は建たない。いつ建つとも分からない。でも、塔はその建造の進むごとに法華経を持つ人の心に信仰の形を成していく。否、法の在る所に宝塔は必ず湧現（建つ）するのである。

テーマ「見える言葉」9